

「中学生のみた昭和10年代」と個人生活史研究： 三段階の分析の試み(下) (1)

著者	水野 節夫
雑誌名	社会労働研究
巻	40
号	1-2
ページ	153-109
発行年	1993-07
URL	http://hdl.handle.net/10114/00018690

Knopf.

14. Mahony, P., 1992, "A Psychoanalytic Translation of Freud," in Ornston, D. G. (ed.), *Translating Freud*, Yale University Press.
15. 水野節夫, 1992 a, 「『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究——三段階の分析の試み——(上)」, 『社会労働研究』, 第 38 巻, 第 3・4 号, PP. 80—118。
16. 水野節夫, 1992 b, 「『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究——三段階の分析の試み——(中) - 1」, 『社会労働研究』, 第 39 巻, 第 2・3 号, pp. 342 - 370。
17. Møller, L., 1991, *The Freudian Reading*, University of Pennsylvania Press.
18. 中野卓編著, 1989, 『中学生のみた昭和十年代』, 新曜社。
19. Polkinghorne, D., 1988, *Narrative Knowing and the Human Sciences*, State University of New York Press.
20. Sacks, O., 1987, *The Man Who Mistook his Wife for a Hat and Other Clinical Tales*, Summit Books. 高見・金沢訳, 1992, 『妻を帽子と間違えた男の話』, 晶文社。
21. 新村出編, 1969, 『広辞苑 第二版』, 岩波書店。
22. Stahl, S. D., 1989, *Literary Folkloristics and the Personal Narrative*, Indiana University Press.
23. Tomkins, S. S., 1987, "Script Theory," in Aronoff, J., Rabin, A. & Zucker R (eds.), *The Emergence of Personality*, Springer, pp. 147 - 216.
24. Wengle, J. L. 1988, *Ethnographers in the Field*, The University of Alabama Press.

★本稿は平成五年度文部省科学研究費一般研究(c)による成果の一部である。

脈絡からすれば、この親密性の側面に関連しても自己の姿のあいまい化は起こりうると想定していいだろう。

- 11) Freud[1918] に加えて Møller[1991 :pp. 57 - 84] と Mahony [1992 :p. 30] をも参照のこと。
- 12) 後者の選択肢に関連しては、『精神分析入門』でフロイトが行なっている間接証拠についての議論（フロイト [1977 (上) : pp. 58 - 60]) と比較されたい。

『中学生』論文（下）- 1 のための参考文献一覧

1. Davis, M., 1973, *Intimate Relations*, Free Press.
2. Erikson, E. H., 1950, *Childhood and Society*, Norton.
3. Erikson, E. H. 1968, *Identity: Youth and Crisis*, Norton.
4. Freud, S., 1899, "Ueber Deckerinnerungen," *Gesammelte Werke*, Bd. 1, 529 - 554. 小此木啓吾訳, 1970, 「隠蔽記憶について」, 『フロイト著作集 6 自我論・不安本能論』所収, 人文書院, pp. 18 - 35。
5. Freud, S., 1916 - 7, *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*, Studienausgabe Bd. 1. 高橋・下坂訳, 1977, 『精神分析入門（上・下）』, 新潮社。
6. Freud, S., 1918, *Aus der Geschichte einer infantilen Neurose*, Studienausgabe Bd, VIII.
7. Gouldner, A., 1970, *The Coming Crisis of Western Sociology*, Basic Books.
8. 林四郎他編著, 1984, 『例解新国語辞典』, 三省堂。
9. Jung, C. G., 1962, *Erinnerungen, Traeume, Gedanken*, hrsg. von A. Jaffe, Rascher. 河合・藤縄・出井訳, 1972・1973, 『ユング自伝 1・2』みすず書房。
10. 古谷田早苗, 1986, 「ライフ・オリエンテーションと『重要な他者』」, 法政大学社会科学部社会科学研究科社会学専攻 60 年度修士論文。
11. Laing, R. D., 1961, *The Divided Self*, Penguin Books. 阪本他訳, 1971, 『ひき裂かれた自己』, みすず書房。
12. Laplanche, J. et Pontalis, J. 1967, *Vocabulaire de la Psychanalyse*, Presses Universitaires de France. 村上仁監訳, 1977, 『精神分析用語辞典』, みすず書房。
13. Levinson, D. et al., 1978, *The Seasons of a Man's Life*, Alfred A.

を支えにしながらこの負の体験の痛手に耐えつつ必死になって失敗の意味転換を図っていかうとしている中野さんの姿である。

- 3) Polkinghorne[1988 :pp.4-6] があげているのは、(1) 同一性の発見・確認(一>本文での位置づけでは(a)の(イ)), (2) 類似性の発見・確認(一>(a)の(ロ)), (3) 例示の発見・確認(一>(c)の(ホ)), (4) 代理関係の発見・確認(一>(d)の(ト)), (5) 部分の発見・確認(一>(c)の(ヘ)), (6) 原因の発見・確認(一>(b)の(ニ))の六つである。
- 4) この発言は、ジミーという19歳以降の記憶が空白になってしまった事例の冒頭(Sacks[1987 :p. 23])に掲げられたエピグラフからのものである。
- 5) なお、この核心的自己主題化局面自体は、本文でも触れたように、典型的には青年期に生起しやすいものだが、しかし原理的には自己が危機に見舞われるところでは常に浮上する(場合によっては繰り返し浮上する)可能性に開かれているという点も忘れるべきではないだろう。
- 6) 本文で述べたように、自己強化と自己弱化とは基本的には自己維持の範囲内でのヴァリエーションと位置づけることにしたいが、自己過程に関する実際の事例を見ていく場合には、両者が微妙な形で自己変化に接続していくケースがありうることに目配りしておかなくてはならないかもしれない。
- 7) この親密さにまつわる問題が切実さや深刻さを増してくると、当事者間の愛憎問題という色調をおびてくることになる。
- 8) 二人関係に絞った形でこの問題を包括的に検討しているすぐれた著作としてDavis [1973]がある。
- 9) さしあたりLaplanche[1967 :pp. 294 - 297]の「対象」の項を参照のこと。
- 10) 古谷田[1986 : p 16 - 25]によるライフ・オリエンテーションの二側面についての議論を参照のこと。彼女はそこで、ライフ・オリエンテーションの一側面である「活動・活動観」についてのイメージを本人が何らかの事情からはっきりもてない場合、これを「活動・活動観」の不定形さ、不明確さ(amorphous)として位置づけているが、この発想は、ぼくの言う意味での自己の姿のあいまい化の発想と通じ合うところがある。彼女はライフ・オリエンテーションのもう一つの側面として設定している「親密性」については、居心地の悪さ(unfit)や不安定さ(unstable)を主題化しており、これはこれで意味のある視点だと思うが、ここでの議論の

第三に、自己環境の構成要素としてどういったものを具体的に想定しうるかと言えば、Levinson 氏らや Stahl 氏があげていたもの、あるいは Wengle 氏が同一化対象としてあげていたものなどを含めていくつもあげることができるわけだが、ここでのポイントは、個人の自己感覚や意識と響きあったり、その個人に懐かしさの感情を喚起したり、といった場合も含めて、「個人にとって意味がありその個人に対して何らかの諸帰結をもたらす」存在であれば、自己環境の構成要素たりうるということである。こうした存在をここでは関係的对象（人・もの・こと）と呼んでいる。これには、その個人の自己形成に関連のあることが確定している‘主要な関係的对象’とともに、本人自身としてはその存在の重要性を意識していないにもかかわらず、事実上、その個人の自己を下支えしていると思える‘副次的な関係的对象’が含まれる。

最後に、ある個人における自己環境の構成要素に着目する理由に触れておこう。それは、それらを特定化するとともに、その各々がその個人にとってもちうる意味や諸帰結を明らかにすることによって、その個人において（四重の意味での）関係的对象がつくりだす世界の特質と広がりをつかみ上げさせてくれることができ、そして、そのことを通じて、間接的な形でその個人のありようを照らし出すことになると思われるからである。

注

- 1) 本文で提示した規定様式のヴァリエーション設定にあたっては古谷田〔1986〕の「重要な他者」の諸類型析出の際の発想を参考にしている。
- 2) 『中学生』の中で言えば、高校受験に失敗した中野さんが友人の増田氏に送った葉書の文章はこうした脈絡で読むことができる。「……言い遅れたが僕は予想通り投げ出された。勿論、入試の話だ。しかし僕は暗闇ではない。ゲーテは、あらゆる彼の周囲の状況を利用して彼の内容を整える材料とした。彼はいかなる体験をも必要とし、かつ、それを求めてあらゆる経験に身を進めた。これを思えば、僕はこの機会を感謝しないわけにはいかない。」(p. 190)ここに浮かび上がってくるのは、ゲーテの思想

他者」たちと対比させる形で、ある個人に対して身近な他者たちが果たしている貢献に目を向けさせるために〈親密な環境〉を設定しているということである。つまり、そうした〈親密な環境〉に囲まれているからこそ、ぼくたちは、自分たちのライフ・オリエンテーションや自己を維持しえているのであり、にもかかわらず、ぼくたちは、通常、そうした親密な他者たちの重要性をほとんど意識していないのである。彼女はこうした〈親密な環境〉の基本的機能を二重の意味でのライフ・オリエンテーションの維持機能と呼んでいる。一つは、「自己存在の受容によるサポート機能」(p. 91)であり、もう一つは、自己の安定性が脅かされた場合に発揮される「ショック・アブソーバーや苦痛の緩和(alleviation)といった機能」(p. 92)である。

古谷田氏の議論については次の二点に注目しておきたい。一つは、自己維持過程を媒介する対人的契機として、〈親密な環境〉、つまり親密性を軸にした対人的環境に着目しているということである。もう一つは、その対人的契機を、狭義の「重要な他者」と〈親密な環境〉(彼女は、こちらを広義の「重要な他者」とも呼んでいる)という形で二重化させて提示している点である。自己維持過程をこのように二重化して把握するやり方は、Wengle氏の場合にも見られたことで、それ自体注目に値する。

(5) 小括——以上の検討をふまえて、自己環境とその構成要素の特徴について次の四点を押さえる形でこのセクションを終えることにする。

第一に、自己環境というのは、ある個人の自己を取り巻く形で、しかも自己過程をクローズアップしてこようという脈絡で関わりを持ってくる対象世界的諸契機が作りだしてくる世界のことだということである。これを先では、「関係的对象の総体」と表現したわけである。

第二に、自己環境は、基本的に自己維持過程を媒介する存在としてあるわけだが、とりわけ注目に値するのは、自己感覚・意識や自己の姿を下支えする機能をそれがもっているという点である。

を夢で見ることを、現地の人々との性的関係を避けること、慣れ親しんだ食べ物を欲しがること」(p. 25)等があげられている。要するに、「ふるさとの世界」との結びつきや「ふるさとの世界」への懐かしさを喚起してくれるものであれば、こういったものでも同一化の対象となりうるということである。

Wengle 氏の議論から摂取してきたい点は次の二つである。一つは、自己環境の構成要素という場合、それに該当するものとしては、Levinson 氏らの議論に登場してくるマクロ社会学的諸契機や Stahl 氏の言うような民俗集団とともに、ある個人の核心的自己感覚と響きあうものや出来事、あるいはその個人が埋め込まれていた「ふるさとの世界」への懐かしさを否応なく喚起してくれるものや出来事も想定しうる、ということである。もう一つは、自己維持過程の構造的媒介契機として重要な他者と同一化対象の二つを設定していることである。

(4) 古谷田氏の〈親密な環境〉論——自己環境論への示唆を与えてくれているものとして最後に取り上げたいのは、古谷田氏の〈親密な環境〉論である(古谷田〔1986〕)。彼女は、ぼくたちが「常に何らかの『方向性』や『志向性』を示しつつ生きている」(p.1)という点をふまえて、これをライフ・オリエンテーションと名づけ、このライフ・オリエンテーションに及ぼす対人的影響の問題を「重要な他者」論として展開している。〈親密な環境〉論というのは、この議論の一環として提示されているものである。彼女によれば、〈親密な環境〉というのは「人の一生を通じ、常に何らかの形でその人間を取り巻き、囲んで(environ)在る、家族や友人といった、本人にとって『親密性』を抱かせるような他者たち」(p. 89)のことである。彼女はまた、「ある人間にとって『親密性』を抱かし得る他者はすべて『〈親密な環境〉を構成する他者』とする」(p. 90)とも述べている。ここで注意しておいていいのは、「ある人の人生において突出した形で記憶され、しかもかなり直接的にライフ・オリエンテーションを媒介」する(狭義の)「重要な

の理論的フレームワークとして展開しているものである。

彼によれば、フィールドワークというものは、一人前の人類学者として認められるために必要とされる一種の「通過儀礼」として位置づけることができるという。しかも、この「通過儀礼」において、人類学者は、それまで慣れ親しんでいた文化的・物理的環境を突然喪失すると同時に、新しい環境の中に溶け込んでいくこともできず、その意味で、二つの文化世界の狭間に身をおく事実上のマージナル・マンとならざるをえないのである。その結果、人類学者は、構造的に本人のアイデンティティ感覚の危機に直面することになる。人類学者は、そのアイデンティティに対してフィールドワークでの活動が突きつけてくる、この構造的危機をどのようなものとして体験し、どうやって乗り越えているのだろうか。この疑問を解くことが、本書における彼の課題なのだが、彼はこれをアイデンティティ維持論として解こうとしていると言っている。

彼のアイデンティティ維持論は、ある個人のアイデンティティ感覚を維持する有力な手段を特定化するという形で提出されている。彼によれば、それらは大きく二つに分けられる。一つは、彼が「ふるさとの世界(home world)」と呼ぶものとの同一化、もう一つは、重要な他者——彼はこれを、精神分析の分野で特異な自己心理学を提起した H. Kohut が言うところの「自己対象(self-object)」とも言い換えているが——が果たす鏡像的機能である。関係的对象の特質を照らし出す上では、Kohut に由来する自己対象の鏡像的機能の議論も示唆的なのだが、ここで主題的に論じようとしている自己環境論の脈絡では、第1の契機の方がより関連がある。「ふるさとの世界」との同一化というのは、人類学者が調査にやってくるまでに慣れ親しんでいた「ふるさとの世界」との象徴的連続性の感覚を維持してくれる可能性のあるものとの無数の同一化のことである。そうした同一化の例としては、「〔「ふるさとの世界」の文化的基準から見て〕すてきな服で着飾ること、休日を祝うこと、日記をつけること、手紙を書いたり受け取ったりすること、過去の思い出

けではないということ。第二は、個人のリアリティー感覚にはその個人なりの個性(individuality)が存在するという。そして第三には、特定の個人にとっては複数の民俗集団が存在するということである。つまり、彼女が採用するのは、「どのような集団であれ集団の中にいる人々には個性が見られるということ、ならびに、その帰結として、どの個人についても一人の個人にとってのリアリティー形成に機能している『社会的基盤』は多様であること、この二点を強調する見解」(p. 34)であり、「ある個人のアイデンティティ感覚は、多様な源泉から成長してくるものであり、その内部にいくつかの特定のタイプの情緒を含みもっている」(p. 34)というものである。こうした基本的発想を踏まえて彼女が個人のリアリティー感覚＝アイデンティティ感覚の形成にとって重要なものとしてあげてくるのは、家族、民族的背景、宗教、地域、年齢、性、社会的ネットワーク(社会経済的階級)、職業という8つの民俗集団のカテゴリーである。

自己環境論への示唆という点で Stahl 氏の議論から摂取しておきたいのは次の三つである。第一は、個人のリアリティー感覚やアイデンティティ感覚に影響を与えてくる構造的契機として民俗集団があるという発想である。これは、核心的自己感覚もしくは自己像を下支えしているものとしての自己環境というぼくの議論での位置づけに対応させることができるだろう。第二は、民俗集団の影響の仕方の間接性の指摘である。第三は、八つの民俗集団のカテゴリーを設定する形で民俗集団の分節化を行なっている点である。これは、Levinson 氏らの「社会文化的世界に属するもの」の例示の場合と同じように、自己環境の構成要素を具体的にイメージしていく際の示唆を提供してくれている。

(3) J.L. Wengle 氏のアイデンティティ維持論——ここで紹介する Wengle 氏のアイデンティティ維持論というのは、彼が、人類学者のフィールドワーク体験の諸相を主題的に取り上げている『フィールドのエスノグラファーたち』(Wengle[1988])という本の中で、実質上、そ

もう一つは、個人的体験談に耳を傾けたりそれを読んでいる時、聞き手もしくは読み手の側には、一体、どういった過程が進行していると想定できるのか、ということである。彼女はこの二つの問いに答える形で、聞き手もしくは読み手は、個人的体験談から常に聞き手もしくは読み手個人にとってリアリティー感覚のある何か——彼女はこれを、ほのめかし（つまり、「話が語られていく過程で聞き手が聞き取ってしまうか、受け取ってしまうほのめかし（allusions）」（p. 33））とそれに対する反応として定式化しているが——を聞き取ってしまうのだ、と言っている。彼女によれば、この何かが、話の聞き取り方、解釈の仕方、受けとめ方に決定的な影響を与えているのであり、しかも——この点は、ぼくたちにとってはより重要な論点だが——この何かは、聞き手もしくは読み手の側が個人的体験談と出会うまでに作り上げているリアリティー感覚、アイデンティティ感覚と密接な関連をもっているのだそうだ。

こうして、個々人の個人的リアリティー感覚、アイデンティティ感覚はどのようにして生み出されてくるのか、という問いが重要な問いとして投げかけられてくることになる。そして、これに答える形で提起されてくるのが民俗集団的影響論なのである。「民俗集団（folk group）」というのは、「共有された伝承的知識や知覚の保存主体と見なされるに足るだけの安定性をもっている……集団」（p. 34）のことだが、彼女は、準拠枠としての民俗集団を設定し、この民俗集団がそれ（ら）に属する個々人のリアリティー感覚（ひいてはアイデンティティ感覚）の形成に決定的な影響を与えていると言う。

では、民俗集団はどのような形でその作用を及ぼすのか。彼女によれば、準拠枠の提供主体としての民俗集団が、それに属する個々人の感受性もしくは情緒（sensibilities）をはぐくみ、そのことを通じて、個々人のリアリティー感覚＝アイデンティティ感覚を形成していく、という。

この関連で彼女が注意を促しているのは、次の3点である。第一は、個人のリアリティー感覚は一つの民俗集団によって決定されてしまうわ

いう視点を強調していることである。これは、ぼくが先に自己論で関係的対象の自己過程媒介機能として指摘しておいたことを別の立場から再確認しているものと見なすことができるだろう。第三は、ぼくのいう自己環境に該当するものとして「社会文化的世界」という対象世界のありように関わる諸契機をあげていることである。とりわけ、彼が「社会文化的世界」を「個人にとって意味があり、その個人に対して〔何らかの〕諸帰結をもたらす」限りで問題になってくる、その個人にとっての「社会文化的世界」と限定づけている点を、ぼくとしては評価したい。そして第四は、「社会文化的世界」に属するものという言い方で、自己環境の構成要素（もしくは関係的対象）の候補となりうるものを具体的にリストアップしてくれていることである。

（２）S. D. Stahl 氏の民俗集团的影響論——次に紹介したいのは、フォークロア研究者である S. D. Stahl 氏の民俗集团的影響論（a theory of folkloristic influence）である（Stahl〔1989〕）。彼女が主題化したいのは、個々人の個人的リアリティー感覚、アイデンティティ感覚の形成に対して彼女が言うところの「民俗集団」が及ぼす影響いかんという問題なのだが、彼女はこれを、個々人の個人的体験に由来する話——つまり、彼女が言うところの「個人的体験談（personal narrative）」——を、聞き手もしくは読み手がどう解釈するか、という問題との関連で提起している。少し横道にそれるが、どういう脈絡で個人的リアリティー感覚・アイデンティティ感覚にまつわる問題を出してくるのか、を確認する上では大切なところなので、もう少し細かく跡づけてみると、次のようになる。

Stahl 氏は、ぼくたちが同じ個人的体験談を聞いたり読んだりしても、聞き手もしくは読み手が作り出してくる解釈の仕方は多様にならざるをえないという経験的事実を確認した上で、個人的体験談の解釈の仕方について、事実上、次のような二つの疑問を提起している。一つは、どういった事情からそうした多様な解釈は生み出されてくることになるのか。

次の3つのパースペクティブである。

第一は、ある特定の「個人にとって意味があり、その個人に対して〔何らかの〕諸帰結をもたらす」(p. 42)限りで問題になってくる、その個人にとっての「社会文化的世界(sociocultural world)」である。彼がこの社会文化的世界に属するものとしてあげているのは、「階級、宗教、エスニシティ、家族、政治システム、職業構造、……周囲の文化、社会運動、……戦争や不況といった大きな出来事……」(p. 42)といったものである。

第二は、その個人にそなわっている自己の諸側面である。ここで彼らが念頭においているのは、個々人には自己の側面がいくつもあるということ、しかも、ある個人の生きている、ある特定の時点もしくは時期を考えてみた場合、その個人は、自己のいくつかの側面を生かしながら、しかしそれと同時に別の諸側面は無視もしくは殺しながら生きていかざるをえない存在だ、ということである。彼らは、こうした特徴を持った自己のありよう自体、生活構造の要素に含まれるという。

第三は、その個人がどのような形で外的世界と関わりあっているか(彼らは「世界への参加」(p. 42)という表現を用いている)ということである。彼らは、これを「自己と世界との相互関係」(p. 42-43)もしくは「相互浸透」(p. 47)と言い換えてもいる。

要するに、彼らは、彼らが言う意味での「生活構造」を主題化するにあたっては、「社会文化的世界」という対象世界のありように関わる諸契機と、自己の諸側面の発現・抑圧といった主体のありように関わる諸契機、それから両契機の相互関係——これら三つを視野に入れてくる必要がある、と言っているわけだ。

Levinson 氏らの議論で注目しておきたいのは、次の四つである。

まず第一は、ぼくたちは自己のいくつかの側面を生かしながら、それと同時に別の諸側面は殺しながら生きていかざるをえない存在だ、という非常に示唆的な指摘である。第二は、自己と対象世界との相互関係と

この関連で導入してきたいのは、〈自己環境の構成要素〉という視角である。自己環境自体については、すでに自己論の説明のところで、個人の自己過程に何らかの形でインパクトをもたらす可能性をもった存在である関係的对象の総体として位置づけておいた。また、関係的对象のうち、本人の自己形成に関連のあることが既に確定しているものについては、これを主要な関係的对象と呼んでおいた。したがって、ここで〈自己環境の構成要素〉という場合、論理的には、それが関係的对象のことを指し、主要な関係的对象が構成要素の主要部分をなしていることは言うまでもない。その点をふまえた上での話だが、ここでわざわざこの視角を改めて主題化するのは、この視角のより具体的なイメージづくりをしておきたいからである。以下では、これを、D. Levinson 氏らの生活構造論、S. D. Stahl 氏の民俗集团的アイデンティティ論、J. L. Wengle 氏のアイデンティティ維持論、古谷田氏の〈親密な環境〉論等、この視角を形成してくる手がかりを与えてくれたいくつかの議論を紹介する形で行なうことにしよう。

(1) D. Levinson 氏らの生活構造論——自己環境論に示唆を与えてくれる議論としてまずはじめに紹介したいのは、社会心理学者である D. Levinson 氏らの生活構造論である。彼らは、男性の成人期発達を扱った著作である『人生の四季』(Levinson[1978])の中で、ある個人の「生活構造(life structure)」という概念を提示している。彼の定義によれば、「『生活構造』というのは、ある所与の時点におけるある個人の生活の基礎になっているパターンもしくは構図のことである」(p. 41)。これは、ある個人の人生を把握していく際に、まずはある特定の時点に着目し、その時点におけるその人の(生活＝人生という二重性をおびた意味での)生の基本的パターンを析出してこようとする試み、と言うことができるだろう。

自己環境論に関連する情報が出てくるのは、より具体的にこの生活構造を把握しようとする局面においてである。そこで彼らが注目するのは

いつも参照枠組として機能するというわけではないけれども、しかし問題となるテーマ次第では密接な関連が生じてくる可能性をもった——その意味で、その個人にとっての「領域仮説」(Gouldner[1970])的機能をはたす——参照枠組のことである。特定の個人にとって、あるタイプの体験群との親和性が強くなりやすいのは、こうした主要な関係的对象が有力な参照枠組として既にその個人の中に存在しているからなのである。

この主要な関係的对象を、さらに先に第三点の第一の事情の説明のところで触れた‘何か新しい対象(人・もの・こと)との出会い’の重要性と関連づけて言えば、‘何か新しい対象(人・もの・こと)との出会い’という本人の受けとめ方が強ければ強いほど、その‘何か新しい対象(人・もの・こと)’は、本人の主要な関係的对象の一部に組み込まれる形で、新たな参照点を形作る可能性が大である(ただし、『中学生』で見る限り、先の「尺八の調べ」の場合には、はたしてそうした参照点の一つになったかどうかははっきりしないが)。そして、ひとたび参照点が形成されると、それ以降、この参照点との関連で、いろいろと物事を考えるという回路が本人のなかにいわば制度化されてくると見ていいだろう。

4.1.3. 自己環境の構成要素

先に、4.1.1. で自己もしくは自己形成への顕在的インパクトと潜在的インパクトとを分析的に区別しておいた。顕在的インパクトに関しては〈インパクトを与える可能性のあるもの〉という概念を提示することによって、ぼくなりに一応の見通しをつけたわけだが、ここでは、潜在的インパクトの方に重点を移して(ということはつまり、顕在的インパクトをも視野に入れている、ということである)、ある個人の自己形成に対して環境世界が及ぼしうる影響可能性という問題をもう少し詰めてみることにしたい。

がぼくの判断なのである。

ちなみに、先に事例1や事例2のエピソードをIP2のグループに入れたが、そうした判断をしたのは、少なくとも『中学生』の中ではそれらが各々一回しか生起しておらず、第二の事情も第三の事情も当てはまらないからである。

第四は、他のデータと照らし合わせた場合の、そのエピソードの位置関係である。これは、そのエピソードが指し示している〈インパクトを与える可能性のあるもの〉が、まったく孤立したものか、それとも、対象となる人物の自己形成に関連のあることが既に確定しているか確定しうる関係的对象（人・もの・こと）と何らかの関連が見いだせるか、の違いである。前者の場合はIP2が、後者の場合はIP1が、それぞれ帰結しやすくなるはずである。例えば事例4について言えば、問題のエピソード自体は一度しか出てきていないけれども、井上先生にまつわる話は何度も登場してきているわけだし、『中学生』を通読すれば、当時の中野さんにとって井上先生が重要な存在だったこと（後述4.2.1参照）は火を見るより明らかである。こうした点に加えて、先に見たように、中野さん自身がはっきりと「実に立派な説だった」と述べていることは、この事例にあらわれているような井上先生の発想のスタイルを中野さんが継承している可能性を高くしている。

ここで第二点の指摘に戻って説明を続けると次のようになる。ある具体的個人に即して見た場合、第三点のところで第四の事情の前提の一つとして設定した、本人の自己形成に関連のあることが既に確定している関係的对象（人・もの・こと）というものは——これらをここでは‘主要な関係的対象’と呼ぶことにしたいが——、問題になっている時点もしくは時期までにすでに歴史的・相互行為的に形成されてきたもので、本人が自分のいわば核になる価値観、人間観、〈問題・関心・テーマ〉群などを主題化しようとする際には有力な参照枠組を形作っているものと想定できる、ということである。ここで有力な参照枠組というのは、

IP1 への転化を促す事情としては、弱いと言わざるをえないのではないかとぼくは考えている。というのは、現実の場での類似のエピソードの生起よりも本人の回想の中での繰り返しのほうが、本人の主観的世界での類似のエピソード同士の結びつきとそれらのエピソードが本人にとってもつ意義の大きさをよりはっきりと示してくれていると思われるからである。

それはともかく、この第三の事情に属する微妙な場合としては、事例3をあげることができる。既に先にも触れたように、相対化の発想ということで括れば、少なくとも「矢田部先生の発言」と「時局」の二か所に類似したエピソードが登場してきており、その意味で、この事例は IP1 の可能性を持っているとすることができるかもしれない。しかし、連想の形であれ、それらのエピソードを他ならぬ本人自身が相互に関連づけている痕跡が見られないという点は、ここで注意しておいていい。つまり、たとえ分析者の観点からすれば、何らかの形でエピソードの類似性が見いだしたとしても、原理的に言って分析者は勝手に読み込む形で独自の観点を設定することができるという事情（そのこと自体が悪いわけではない。念のため）を考慮に入れるなら、それだけではそうしたエピソードが IP1 に属するものと判断するには必ずしも十分ではないということは確認しておく必要があるだろう。この場合、分析者にできることは大きく言って2つある。一つは、関連データの中に、確かに本人自身がそうした類似性を見つけだしていたということを提示すること。もう一つは、——そしてこれは、とりわけ、本人自身が気づいていないところに何かを見いだすことこそが分析者による解釈の意義であるという立場をとる分析者の場合に言えることだが——そうした形で提示することが不可能な場合には、状況証拠を積みあげていけば、そのように推測することができるということを、説得的に示すことである¹²⁾。そして、事例3の場合について言えば、関連データの中に類似性を見つけ出すことも状況証拠を積み上げていくこともできないのではないか、というの

こと)との出会い’ という形で本人に受けとめられるか否か、という点であろう。例えば事例5の「尺八の調べ」のように、あれほどまでのショックを伴って受けとめられるなら、そのエピソードはIP1となる確率がそれだけ高くなる。

第二は、問題のエピソードもしくは類似のエピソードが回想という形で繰り返し見られるか否かということである。事例6の「ハチマキ石のエピソード」の場合には、データの的にそうした反復を確認することができる。しかもこの事例の場合には、そうした事実に加えて、問題の幼児期体験が回想されてくるたびに、もしかしたら S.Tomkins 氏が言うところの「情動的増幅作用 (affective magnification)」(Tomkins [1987 :pp. 149 - 153]) が働いていた——つまり、このエピソードが初めて生起した時に幼い中野さんを襲ったに違いない情動的体験の余韻が蘇ってくるとともに、その体験にまつわるいわば波紋としてさまざまな思いが生みだされていた——かもしれない、という点は注目しておいていいだろう。ここでの議論にさらにひきつけるなら、あるエピソードの想起にこうした「情動的増幅作用」が伴う場合には、そこにほぼ確実にIP1を見いだすことができると言ってもいいかもしれない。なお、あるエピソードが本人の人生の途上で何度となく想起されてくるということは、そのエピソードが——あるいは、S.Freud の「隠蔽記憶 (Deckerinnering)」論 (Freud[1899]) を踏まえて言えば、場合によってはそのエピソードによって体現され・代理されている何か別のものが——本人に与えたショックの度合を推しはかる一つの目安と見なすこともできるだろう。

第三は、問題のエピソードもしくは類似のエピソードが、現実の場で生起してくる頻度である。この頻度が多ければ多いほどそれらのエピソードがIP1となっていく確率をそれだけ高くしている、と一応言うことができるだろう。ただし、この第三の事情は、回想という形で現れてくる第二の事情ほどには、あるいは第二の事情と連動して作用しない限り、

て、その人物の後の人生において大きな意味をもつようになることがあるという点をも視野に入れながら、考えだされたものなのである。

この概念に関連して、ここでは次の三点に注意しておきたい。

一つは、何が〈インパクトを与える可能性のあるもの〉となるかは、原理的には、まったく予想できない、つまり「一寸先は闇もしくはパラダイス」ということである。ある人の人生に決定的な影響を与える事態は、どこでも、いつでも生起しうるものなのだから。生活史的データの分析・解釈にあたっては、生活体験、とりわけ〈体験〉もしくは〈体験〉ポテンシャルの秘めている意外性と、そうした体験群を生み出してくる偶然的事情(contingency)への目配りが必要とされるゆえんである。

二つ目は、にもかかわらず、ある個人による本人の生活史上の画期的出来事の受け止め方との関連で言えば、そうした点に関するその個人の生活史的背景情報をかなり入手している場合には、こういったタイプの体験群が〈インパクトを与える可能性のあるもの〉としてその個人に受けとめられていきやすい傾向を持っているかということ——これを、本人にとっての‘あるタイプの体験群との親和性’と呼ぶことにしよう——を、かなりのところまで予想することが可能だということである。ただし、この点の説明をするためには、あらかじめ第三点に触れておかななくてはならない。

ここで第三点というのは、こういった事情が IP1 と IP2 との違いを生みだしてくるのか、あるいは、生み出してくるのに貢献しているのか、という疑問である。この点については、大きく言って次の四つを指摘できるように思われる。

第一は、問題のエピソードもしくは体験自体の^〇強烈^〇さの^〇度合である。これは、例えば情動的反応の強さ、情動的・精神的ショックの強さ、その時点もしくは時期における（三重の意味での）自己形成への貢献度の違いなどといった形であらわれてくる。ここでとりわけ重要と思われるのは、問題のエピソードもしくは体験が‘何か新しい対象（人・もの・

後になって発現してくるインパクトの[○][○][○]可能性だからである。つまり、〈インパクトを与える可能性のあるもの〉というのは、まず第一に、ある時点に本人が出くわした生活体験的エピソードが、その時点を超えて、その人物のその後の人生において何らかのインパクトを及ぼすことがある、という経験的事実をふまえているということ、しかも第二に、〈インパクトを与える可能性のあるもの〉は、あくまで可能性であって、結果的にはその人物のその後の人生に対してインパクトを及ぼさなかった場合、もしくはデータとの関連でその後の人生に対するインパクトを特定化しえなかった場合も含むということである。

言いかえると、〈インパクトを与える可能性のあるもの〉は次の二つの可能性に開かれているということである。第一の可能性は、先にあげた事例6や、恐らく事例4のように、〈インパクトを与える可能性のあるもの〉が実際に問題の人物のその後の人生に対してインパクトを与える場合である。これを〈impact potential1〉（略してIP1）と呼ぶことにしよう。4.2. では、このグループに属すると思われる人・もの・ことを中心にして、より立ち入った検討をしていくことになるだろう。第二の可能性は、〈インパクトを与える可能性のあるもの〉がその時点だけの単発的な体験にとどまってしまう場合、つまりその後の人生へのインパクトという点では単なる可能性としてとどまってしまう場合である。こちらはIP2と呼ぶことにする。事例1と事例2はこれにあたると言えるだろう。事例3も、後述の理由から、このグループに属するようと思われる。

要するに、〈インパクトを与える可能性のあるもの〉という概念は、ある時点もしくはある時期に本人が出くわした生活体験的エピソードが、（a）その本人に顕在的インパクトを与える場合には、そのインパクトの内的反響をその人物のその後の人生においても見いだすことがある、という点をにらみながら、また（b）顕在的インパクトを与えない場合でさえ、事情次第では後になって何らかの意味変換をとげることによっ

験、あるいは日常的覚醒意識からのズレの際立った体験という形で小括したもの）や体験群3（本人にとって心理的にインパクトがあるか個人的に意味のある体験のこと）に属する体験群はすべてこの〈インパクトを与える可能性のあるもの〉という概念に含まれることになる。

これに対して、わかりにくいかもしれないのは、後になって効果が現れてくるという後者の場合だろう。ぼくたちは、実際にある体験をしている最中には、そのことの意味がわからず、したがって自分にとって意味のある何らの反応も示さなかったにもかかわらず、後になって何かをきっかけにして（例えば、その過去の体験を連想的に想起させてくる出来事と出会うことによって）過去の体験の意味に気づいてギョッとしたり感動したりする、といったことがあるということなのだが、これは、実は S. Freud が「事後性 (Nachträglichkeit)」という言い方で注目している現象である¹¹⁾。ラプランシュとポンタリスはこれを「経験、印象、記憶痕跡は、新たな経験により、あるいは心的発達がもう一つの別の段階へとさしかかると、後日組みなおされ修正される。その場合、新たな意味と同時に、ある心的効果が付与される」と説明している（ラプランシュ〔1977 : p. 186〕）。『中学生』の中から直接的にこの部類に属する事例を捜し出してくるのはきわめて困難ではあるが、先の事例の中でこれに近いものをあげてくるとすれば、事例6ということになる。つまり、この視点に立つなら、そこに出てくるハチマキ石のエピソードにおいて幼かった中野さんがオタケドンの言葉を耳にした時点で（実際はそうではないのだが）仮にその言葉の含意がわかっていなかったとしても、もし中野さんがこの場面のことを覚えていたとすれば、彼女の言葉の効果は事例6に見られるのとはもっと違った形で後に出てきていたかもしれない、ということである。

それにしても、なぜそのものズバリ〈インパクトを与えるもの〉と叫ばないのか。それは——こう言うと奇妙に聞こえるかもしれないが——ここで考えているのが、後々まで持続性をもったインパクト、もしくは

ここで例示的に提示したさまざまな生活体験に着目して、それを、あるエピソードとして描き出したものを‘生活体験的エピソード’と名づけることにする。ある生活体験的エピソードが〈インパクトを与える可能性のあるもの〉と呼べるためには、そのエピソードは次の2つの要件のうちのいずれかを満たしていなければならない、というのがぼくの考えである。一つは——そして大多数の場合こちらに入るのではないかと思うが——少なくとも問題のエピソードがおこった時点では、そのエピソードが本人に対して何らかの顕在的インパクトを与えていると見なすことができるということである。もう一つは、問題のエピソードがおこった時点では、当の本人にはそのエピソードが自分に対して何らかの顕在的インパクトを与えているとは判断できないにもかかわらず、後になってそのエピソードの意味変換という形でその効果を見いだすことになるというものである。

前者の方がわかりやすいだろうから、まずこちらについて言えば、分析者の側からすれば、各エピソードに見られる出来事の受けとめ方や、そこにあらわれている物の考え方、体験の仕方などは、それが生起している時点、もしくはそれを書きとめている時点における本人（ここでは中野さん）に何らかの形で影響を及ぼした可能性がありそうだと判断しうるものである。そして、ぼくの考えでは、先にあげた六つの事例はいずれもこの要件を満たしている。より具体的に言えば、事例1、事例2、事例5、事例6には、プラスであれマイナスであれ、本人のうちにかなり強い情動的反応をひきおこしたと判断しうる体験が含まれている。また、事例3、事例4、事例5には、発想・思考次元や感じ方の次元で、本人にとって重要な意味がありそうに思われる体験が見られるし、事例5、事例6の場合には、本人が情動的もしくは精神的なショックを受けたことが明らかである。「3.3.1. 生活体験の分節化」（水野〔1992 b: pp. 349 - 360〕）での用語を使ってもっと広げて言えば、体験群2（つまり、感情や思考にまつわる体験、過去への飛翔もしくは退行を特徴とする体

事例6 「ハチマキ石のエピソード」

・・・鉤物の時間、「アゴ」先生がハチマキ石の標本を見せられたが、これを見て、幼なき日の思い出が浮かんた。垂水の海岸で小さい手に持ち切れぬほどハチマキ石を拾い集めた。しかし、オタケドンが言った言葉で、惜しかったが全部捨ててしまった。「ハチマキ石を拾うと親の死に目に会えない。二本筋の捲いたのは父親の死に目に会えず、一本筋の捲いたのは母親の死に目に会えない」と。
(p. 68)

オタケドンというのは、中野さんが幼かった頃に彼の世話をしていた、中野本家のオナゴシサンの一人である。「ハチマキ石を拾うと親の死に目に会えない」という言葉が、当時、父母のもとを離れて暮らしていたらしい幼い中野さんの心に、ほとんど心的外傷体験と言っていいほどの強烈なインパクトを与えていたらしいことは、ほぼ確かである。ここでは、一応、インパクトを与える可能性のあるものの例として出しているわけだが、「おたけどんへの手紙」の中でも、「・・・はちまき石を持っていると、親の死に目に会えないと、おたけどんが言ったので、僕は驚いて、石をみんな捨ててしまったこと。それでも、しばらくは手に持っていたせいで親の死に目にあえなくなりはしないだろうかと心配したりしたこと」(p. 185)と述べられていることから明らかなように、このエピソードは、インパクトを与える可能性のあるものの水準を超えて、中野さんの自己形成へのインパクトそのものになっていると断定してさしつかえないかもしれない。

以上、六つの事例を見てきたわけだが、これらの事例は、その内容という点で見ると限り非常な多様性を持っている。にもかかわらず、これらの事例を〈インパクトを与える可能性のあるもの〉の例として括れる——ぼくは、そう主張したいわけだが——とすれば、それはなぜなのだろうか。

先に3.3.1.で生活体験の分節化を行なったわけだが、今ここで、そ

先生の話と、それに対する中野さんの感想である。「実に立派な説だった」という、全面的な同意とっていい中野さんの書き方からすると、「外国のままを日本にあてはめ」るのではなく、「昔の日本はどうだったかと考えてみる」という先生の発想のスタイルを、中野さんが継承していった可能性が強いわけだが、仮にそうでなかったとしても、先生の発言に中野さんが強い共感をおぼえていることは確実である。

事例5 「尺八の調べ」

夜、[ポール・ゴウガンの] ノア・ノアを読んでいると、遠くから不思議な響きが聞こえて来た。はじめは耳を疑い、耳を澄まして、人の声かと思った。長く、一定の時間づつ響いて、消え、また響いた。ひとつずつ違った響きとふるえ、強弱と余韻をもっていた。女の声にしてはおもおもしろく、男の声にしては高いようにも思えた。管楽器それも植物性の音。木管楽器でもないことは、その鋭さ、冷たさ、激しい強い深いかすれたような音から知られた。古い日本の調べ。ノ 尺八。この哲学的な音色をもつ楽器の素晴らしさを、今夜初めて知った。(p. 206)

これは尺八の調べとの出会いを感動的に書きとめたものだが、『中学生』の中には、この他にも、ワインガルトナー夫妻の演奏会で「コウコツとしてしまった」(p. 136) 話や、「ホットジャズへの共感」(p. 139) のエピソードなどが触れられており、昭和十年代という軍国主義的・民族主義的色彩の濃い厳しい時代の中で、さまざまなジャンルの音楽に耳を傾け、しかもそれらに感動していたことがわかる。さらに、既に小見出し分析のところでも指摘しておいたように、音楽だけでなく、映画、美術、演劇など、多様な芸術との出会いについても数多くの言及がなされている。日記のデータだけでは断定できないにしても、こうした感動体験を通じて中野さんの美意識もしくは音感がつちかわれていったらしい、というあたりまでは言うことができるだろう。

だろう。しかし、自分なりに着実な形で予習をこなしていたらしい中野さんの場合、そうした教師の発言は、かえって「先生方の生徒を見る目が不確かな場合があること」の一例と見なされている。ここで注目したいのは、「中野はこのごろ、なかなかよくやって来るようになった」という先生の発言に誘発される形で、中野さんの内に顕在化されてきた〈物事をつきはなしてながめる姿勢〉である。これに似た姿勢は、国境線をめぐるソヴィエト側と日本軍側とのやりとりを、ほぼ等距離からながめている「時局」(pp. 42 - 43)での発言の場合にも言えることで、二つの状況自体まったく異なるだけに、このいわば〈相対化の発想〉と言えるものを、中野さんはこの当時既にかなり身につけていたらしいことがうかがえる。ただし、そうした姿勢が『中学生』執筆当時一貫して保たれていたと言えるかという点になると、後に中野さんの時局観の変化を跡づける際に見るように、必ずしもそうとは言いきれないことにも注意しておく必要がある。

それにしても、「中野はこのごろ、なかなかよくやって来るようになった」という発言をしたこの教師が、矢田部先生ではなく、次に紹介する井上先生だったとしたら、中野さんはこういった印象を書き残していたのだろうか。

事例4 「茶話会での先生の話」

「・・・ちかごろ現今の道徳を論じている人々の説は、一つも私は満足しません。皆、外国のままと日本にあてはめているのです。外国の事を日本に持って来るのに、昔の日本はどうだったかと考えてみるのが必要です。日本の現在の道徳を考えるには、歴史上の道徳からみていかなければなりません」。実に立派な説だった。(pp. 8-9)

これは、「特に私の今の学問の仕方に深い影響を与えてくださったと思われる井上頼寿先生」(p. 3)が主催する史学会の茶話会の席での井上

どちらも、社会階層上の地位の違いに起因する出来事が、中野さんに、ある印象を残したエピソードとして位置づけられるだろう。事例1は、中野さんが、小学校の同級生の働いている姿を見るという場面に出くわし、〈「日曜なのに働いている」彼 vs. 「犬を連れて散歩している」自分〉、〈「父を失って自分が主人とな」って「働いている」彼 vs. 父が健在でまだ一本立ちもせずブラブラしている自分〉というコントラストがひきがねになって、「自分というものが何とも言えず貧弱に思えて、逃げるように大和大路へ曲がってしまった」経緯が書きとめられている。事例2では、新しい女中の話をきっかけに、「スキヤキを食べている」自分とは対照的な厳しい生活を強いられている「飛騨で見聞きした田舎の人々の生活や、新劇で見た農民問題」のことが連想的に中野さんの頭をよぎり、「思わず頬が妙なぐあいになんてこわばって、まぶたが熱くなってきた」のである。このように、どちらの場合も、問題の出来事は、少なくともそうした出来事に中野さんが出くわした時点においては、彼に対して顕在的インパクトを与えたと判断しうるものである。日記の他の個所での記述からは、これらのエピソードが、その後の中野さんの社会を見る眼に対して、さらにどういう顕在的インパクトを与えることになったかは定かではないが、彼の価値観の形成に対して何らかの影響を及ぼしている可能性は否定できないだろう。

事例3 「矢田部先生の発言」

・・・今日、矢田部先生は、「中野はこのごろ、なかなかよくや
って来るようになった」と僕を褒められた。しかし、僕は別に嬉し
くもない。国副・・・の『つれづれ草』を予習していく量も質も、
これを習い始めた当時と少しも変わっていない。これまでは、あま
りやって来ないと先生は思っていたのだろうか。これをもってして
も、先生方の生徒を見る目が不確かな場合のあることが分かる。(p.
91)

教師にほめられた場合、単純な生徒なら、まずは手放しで喜ぶところ

『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究
ンパクトを与えたと言えるのだろうか。『中学生』のデータから、ぼく
たちはどのようにしてインパクトを与えた人・もの・ことを絞り込んで
ることができるのだろうか。こうした問題を考えていく切り口として、
次に、〈インパクトを与える可能性のあるもの (impact potential)〉と
いう概念を提示したい。

この言い方でぼくがどういったことを考えているのかをわかってもら
うために、まず、『中学生』の中から、この概念に属するとぼくが判断
しているいくつかの事例を出してくることにしよう。

事例1 「犬を連れてのエピソード」

馬町で、畑君（小学校での同級生、与一ツツァン）・・・の家の
前を通るとき、いるかな、と、ふと見ると店で向こうを向いて座り、
器用な手付きで陶磁器を藁で包んでいるのがヨイツツァンだった。
頭の格好や身体付き、動作で確かにそれと分かった。『畑君』と呼
び掛けようとして、ふと、やめておこうという気になった。僕は今、
犬を連れて散歩しているが、彼は日曜なのに働いている。彼は父を
失って自分が主人となり、働いている。そう思うと、僕は自分とい
うものが何とも言えず貧弱に思えて、逃げるように大和大路へ曲が
ってしまった。(pp. 95 - 96)

事例2 「新しい女中」

スキヤキを食べている時、もう少しのところで涙がこぼれそうに
なった。全く驚いた。あのとき突然だ。母が、新しく来た女中の話
をしておられた時だ。母が『うちに来て、夜に寝る時間が遅くてつ
らからう』と言うと、『田舎にいても十一時まで起きて縄ないをし
なければなりませんし、それに朝は五時に起きるのですから、ここ
へよせていただいてからは長いこと寝ていられて、かえって楽で、
こんな有難いことはありません』と言ったということを聞いた時だ。
飛驒で見聞きした田舎の人々の生活や、新劇で見た農民問題を思い
出して、思わず頬が妙なぐあいにならないうちにこわばって、まぶたが熱くなっ
てきたのだった。(p. 191)

のである。

（12）自己形成の意味について——前項までの説明でかなりの自己論の概要を提示しえたと思うが、最後に、それらの検討，とりわけ（6）での自己過程論での説明をふまえて本稿で自己形成という場合の意味について簡単に述べておこう。ここで自己形成と言う場合，それは自己生成，自己変容，自己維持の3重の意味を含みもつ過程のことである。

ここでは、以上の議論を踏まえて、物心がついて以降の人間（自己原型生成後の局面）を念頭におきながら、自己もしくは自己形成へのインパクトの意味について分析的に次の三つの場合を区別しておく。第一は、自己（あるいは自己感覚・意識もしくは自己認識）の強化・再確認である。これは、本人の思考圏や価値観などの中にすでにあったものを強化・補強・再確認するという形でのインパクトである。第二は、自己（あるいは自己感覚・意識もしくは自己認識）の変容・拡大である。これは、それまでは本人の中にはなかったもの（発想や価値観，感受性など）を生みだしていく，もしくは植えつけていくという形のものである。第三は、自己（あるいは自己感覚・意識もしくは自己認識）の深化・鮮明化・結晶化である。これは、本人の側に素地としてはあったが、必ずしも自覚されていなかったものをはっきりと対象化し開花させていく，という形でのインパクトである。実際にデータを検討していく場合には、これら三種類のインパクトをはっきりと区別するということはむずかしいかもしれないが、以下で自己もしくは自己形成へのインパクトという場合には、これら三重の意味が含意されている。

4.1.2. 〈インパクトを与える可能性のあるもの（impact potential）〉について

『中学生』執筆当時の中野さんの場合、実際にはどういったことがイ

を設定しうるか、そしてまた、それらの関係的对象がどういった布置連関を示すことによって関係的对象の総体としての自己環境をどういったものとして想定しうるのかを確定する段階である（この第一段階については、「4.1.3. 自己環境の構成要素」のところで自己環境の構成要素について検討するという形で、より詳しく論じることにする）。ついで、関係的对象ならびにその総体としての自己環境との相互作用の中で、本人がどういった自己解釈を行なっているかを見るのが第二の段階である。

そして、この第二段階で注目しておきたいのが、[○]自己[○]の[○]姿（自己イメージ・自己像）の[○]結[○]晶[○]化と[○]あい[○]まい[○]化という現象である。自己の姿の結晶化というのは、本人の自己感覚や自己意識という自己把握の日常的様式に照らしてみても、また、とりわけ自己定義や自己認識という観点から見ても、本人の自己の姿がはっきりとした焦点を結んでくる（＝結晶化してくる）ことを指す。これに対して、自己の姿のあいまい化¹⁰⁾とは、自己感覚や自己意識の観点から見ても自己定義や自己認識の観点から見ても、本人の自己の姿があいまいになって焦点を結ばなくなってくることを意味している。先に（6）で自己変化の過程を自己変容と自己解体という2つの過程に細分化しておいたが、この自己の姿の結晶化とあいまい化という用語を用いるなら、自己変容の過程とは、“古い”自己の姿のあいまい化を体験する中から“新しい”自己の姿の結晶化がもたらされてくる過程のことであり、自己解体の過程というのは、自己の姿のあいまい化だけが進行してしまうケースとして位置づけることができる。さらに言えば、自己イメージのあいまい化とは、短期的・一時的に自己解体へと道を開くことであり、自己像のあいまい化ということになると、核心的自己や、場合によっては、自己原型についての感覚や意識がはっきりしなくなるという形で、より深刻な自己解体の過程に身をさらすことを意味するわけである。このようにこの自己の姿の結晶化とあいまい化という現象が本人にとってとりわけ切実な意味をおびてくるのは、自己の危機が発現してきやすい核心的自己主題化局面や自己変化の過程な

にウエイトをおいた形で) 行なうか、によって決められてくるのである。

第三に、ここでは主題的に取り上げることをしなかったけれども、ぼくとしては、ある個人による関係的对象の受けとめ方は、——本人がそのことを意識しているか否かとは関わりなく——文化的なものの圧倒的な影響と浸透を前提として成り立っているという立場に立っているということである。ただし、ある個人が文化的なものの影響をどのように受けているか、とか、個人はそうした影響からどれだけ自由になりうるものなのか、といった問題は、経験的に明らかにされるべき問題であることは言うまでもない。

(10) 自己過程を媒介するものとしての (a) 関係的对象と (b) 自己解釈——関係的对象に自己過程媒介機能があることについては、すでに (9) で指摘しておいた。また意識的な自己のコンテクストづけもしくは自己納得の試みである自己解釈も同じく自己過程媒介機能を持っていることは、(7) での論述から明らかなはずである。自己論にとっての両者の重要性に鑑み、ここではその点を、〈関係的对象ならびにその総体としての自己環境との相互作用の中での自己解釈という形で自己もしくは自己過程は主題化されるものである〉という形で再確認しておきたい。

(11) 本人の眼に映っている本人の姿をめぐって (2) ——本人自身に本人がどう映っているかという問題に接近するために、(8) では自己イメージと自己像という用語を導入しておいた。ここでは (10) の視点をふまえて、さらにもう一步踏み込んで本人自身に映る本人の姿という問題について考えておこう。

〈自己過程を媒介するものとしての (a) 関係的对象と (b) 自己解釈〉という (10) での位置づけを視野に入れるなら、自己イメージやとりわけ自己像の問題は、次のような形で2段階で接近すべきではないかと思う。つまり、まずは、ある特定時点もしくは期間においてある個人における‘主要な関係的对象’ (後述参照) としてはどういったもの

第四は^{。。}超個人的(transpersonal)対象である。これは、宗教的、哲学的もしくは実存的な意味で自己を超越した存在のことで、本人の世界観や価値観次第で、神、自然、宇宙、天といったものがその対象として浮上してくる。先の社会個人的対象の場合が非常な社会性を帯びているのに対して、超個人的対象においては、聖なるものとか自己の内なる超越的なものとの出会いや対話が模索されることになる。

ここで注意を促しておきたいのは、ここで行なっているのは関係的对象の4分節化であって4分類ではないということである。つまり、これまでの説明からすると、ある特定の関係的对象はここにあげた4つの場合のどれか一つにだけ属するのではないか、といった印象を与えたかもしれないが、実際は、例えば上司との関係が同時に対人的関係を含みもつ（一）社会個人的対象でかつ対人的対象）といった具合に、複数の性質を持った対象としてある個人には受けとめられることの方が多いのである。なぜそういうことが起こりうるのか、という疑問をも視野に入れながら、ある個人がある特定の関係的对象をどういった質をもったものとして把えることになるのか、という問題に関連させて、ここで次の3点に触れておきたい。

第一に、関係的对象は、否応なく個人内対象としての性質を帯びざるをえないということである。これは、関係的对象がある個人にとって対象として浮かび上がってくるのは、その個人の主観的世界の中においてのことだという事情に由来している。

第二に、ある個人が関係的对象をどう受けとめるかは、その個人による関係的对象の二重の解釈とそのされ方によって規定されてくるものである。ここで二重の解釈というのは、その対象を“他人”の眼で観察したらどう位置づくか（＝観察者としての位置づけ）、それから対象との関わりの質を体験的実感で意味づければどうなるか（＝体験者としての意味づけ）ということなのだが、関係的对象の質は、その個人がこの2種類の解釈をどういった組み合わせで（あるいは、どちら

第二は個人内(intrapersonal)対象である。これは、問題の個人がその内部において自己に関わるものとして対象化しうるもののことである。したがって、本人の身体、気分などを含めて、本人の自己に関わるものや精神分析で言うところの「対象」⁹⁾は、これに含まれる。個体に自己が登場して以降、つまり自己原型生成局面以降においては、さまざまな自己が個人内対象として重要性をおびてくることは言うまでもない。その場合、個人内のさまざまな自己との“内的対話”が進行することになるわけだが、その“内的対話”がこういった様相を呈するかは、この自己原型生成局面において生み出されてくる自己存在の特質いかん——例えば、R.D.Laingが析出してきたように(Laing[1961:pp. 65 - 77 = 1971:pp. 82 - 100]), “真の自己” vs. “にせの自己”とか“内的自己” vs. “外的自己”,あるいはC.G.Jungが『ユング自伝1』で自分自身の体験的事実として述べているように(ユング[1972:p. 74]) “人格No.1” vs. “人格No.2”という分岐を示すことになるのか、あるいはまた多重人格的性格をもった自己群が相手となるのか等——に強く依存していると言えるだろう。

第三は社会個人的(sociopersonal)対象である。これは、通常、社会学で“地位＝役割関係”という言い方で指し示されているものを含めて、広く社会的な対象(人・もの・こと)を意味している。より具体的には、問題の個人が組み込まれていたり関与せざるをえないさまざまな集団、組織、社会などにまつわる多様な対象がこれに含まれることになる。なぜこれを‘社会個人的’と呼ぶのかと言えば、それは、この対象が、先の対人的対象や個人内対象とは異なった独自の水準としての社会的水準における存在としての個人に関わるものだからである。言い換えれば、この種の社会個人的対象との関係性においては、問題の個人は当該の社会関係のネットワークの中で本人が占めている地位やポジションの占有者として、またその限りで他者たちや出来事と関係を取り結ぶことになる。

そ、ぼくの自己論にとっては基本的なものだ、ということである。この点を確認した上で、関係的对象の意味をもう少し絞り込めば、ここで関係的对象と言う場合、その対象というのは、問題の個人の自己過程に何らかの形でインパクトをもたらす可能性をもった存在ということになる。しかもここで注意しておきたいのは、そうした対象は必ずしも人間である必要はないということである。つまり、ある個人が自分にとっての対象として設定しうるものであれば、——それが人であれ、ものであれ、あるいは出来事であれ——どんなものでも、ここで言う関係的对象になりうるのである。

ただし、同じく関係的对象と言っても、問題の個人とどういった関係にある対象か、その関係の質の違いによって、関係をもっている時点にその個人においてクローズアップされてくる〈問題・関心・テーマ〉群の内容は大きく規定されてくるものである。この点に留意しつつ、ここでは、関係的对象を次のように4分節化しておくことにする。

まず第一は対人的(interpersonal)対象である。ここで‘対人的’というのは、ぼくたちが通常“人間関係”という場合に念頭においているものである。典型的には、親子関係、恋人関係、友人関係といったところで浮かび上がってきやすい人やもののことだが、そうした場合だけでなく、広く人と人との間の“人間的”交流が問題となるところでは、どこでもこの種の対象との関係は見られると言っていい。この対象との関係に特徴的なことは、それが親密さ(intimacy)と(その裏返しとしての)疎遠さを基調とした関係だということである⁷⁾。したがってここでは、多くの場合、‘親密な他者(intimate other)’との相互作用のありようが主題となりやすい⁸⁾。なお、人格形成に対する母の役割をしてくれる人(mothering one)との関係や親子関係の重要性とか、エディプス状況が個体に及ぼすかもしれないインパクトの大きさといった表現からもうかがえるように、ぼくたちの自己原型が生成されてくるのは、こうした対人的対象との関係性を通じてのことである。

うことが自己定義なのである。そして（この自己定義も含めて）自己解釈の作業に携わった帰結として、もしくは自己解釈の過程でその作業に触発される形で（この後者の場合は、思わず知らずひらめいてくる、というケースも見られるだろうが）、その個人にひらけてくる自己の“本質”もしくは“特質”についての洞察が自己認識である。

（８）本人の眼に映っている本人の姿をめぐって（１）——本人自身に本人がどう映っているか。自己イメージと自己像という用語は、この問題に接近するためのものである。

自己イメージとは、個別の状況の中で本人が関係をもってくる対象との相互作用の過程で本人の主観的世界の中に浮かび上がってくる、その時点における本人の姿のことを指す。したがって自己イメージとは、状況的・関係的存在としての自己の姿と言うことができるだろう。これに対して、自己像というのは、本人が主観的世界の中で思い描いている本人の全体像のことである。ある個人の自己像は、個別の状況・関係に由来するさまざまな自己イメージを手がかりにしながらも、しかしそれらを足し合わせた形ではなく、基本的には、個別の状況や関係を超えたところで一貫して存在する自分の姿として位置づけることができる。

ここで特に注意を促しておきたいのは、自己像のもつ統合的機能である。つまり、個人が５感に訴える体験という形で日常的に身をさらしているさまざまな体験や印象を統合する主体としての位置を自己像は占めているということである。

（９）関係的对象の４分節化——先に、個体が関わりをもつさまざまな対象を関係的对象と呼ぶことにしたわけだが、まずはじめにこの点をもう少し敷衍しておこう。ぼくの自己論の一つの柱として状況的・関係的存在としての自己というとらえ方があることはすでに見た。この含意は、自己生成過程においても自己維持もしくは自己変化の過程においても、対象と関わりをもつ中でしか自己過程は進行していかない——つまり、自己過程を媒介するものとして関係的对象はある——という視点こ

も言及しておいたように、自己は、基本的に時間的経過の中で関係的对象との相互作用を通じて、いわば過程として存在しているものである。しかも、ひとたび自己が生成をとげると、自己は己れを維持し続けるにせよ、さまざまに変化させるにせよ、その過程的性格を逃れることはできない。この点に着目して、ここでは $\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{自}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{己}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{生}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{成}}}$ 、 $\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{自}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{己}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{変}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{化}}}$ 、 $\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{自}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{己}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{維}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{持}}}$ という3種の自己過程を区別しておきたい。自己生成は、さらに、 $\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{自}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{己}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{原}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{型}}}$ の生成と $\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{核}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{心}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{的}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{自}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{己}}}$ の生成に、また自己変化は、自己存在が基本的に安定したままで生み出されてくるさまざまな $\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{自}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{己}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{変}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{容}}}$ とともに、自己存在の危機の一帰結とも言える $\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{自}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{己}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{解}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{体}}}$ とに細分化しうるだろう。そしてまた自己維持の中には、 $\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{自}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{己}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{強}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{化}}}$ と $\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{自}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{己}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{弱}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{化}}}$ の過程を含めることができる⁶⁾。

(7) 自己のコンテキストづけの試み——ここでは自己のコンテキストづけの試みに関連する用語として、 $\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{自}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{己}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{解}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{釈}}}$ 、 $\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{自}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{己}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{定}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{義}}}$ 、 $\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{自}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{己}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{認}}}\overset{\circ}{\underset{\circ}{\text{識}}}$ の3つを導入しておく。

ぼくたちは、通常、先に自己把握の2様式として設定しておいた自己感覚と自己意識とに支えられる形で、自分が何者かということの思い悩む必要のない毎日を送っている。しかし、時折——これは、とりわけ核心的自己主題化局面において顕著にあらわれてくることだが——自分で自分がわからなくなってくることがある。そうした時、ぼくたちは否応なく自己をコンテキストづけようとするさまざまな意識的試みに取り組まざるをえなくなる。この、自己をコンテキストづけようとする意識的試みのことを、ここでは自己解釈の試みと呼ぶことにする。そこでは、その時点までに培われてきた自己原型についての感覚や意識と共に——それらと、あるいは共鳴しあう形で、あるいは不協和音をかもしだす形で——印象に残るさまざまな生活場面での自己感覚や自己意識といったものを重要な体験的手がかりとしながら、自己についてのさまざまな仮説を自分自身につきつけようとする試みが進行していると見なすことができるだろう。こうした自己についての仮説提示の作業を言語的に行な

Erikson 氏が述べているように (Erikson[1968]) とりわけ青年期において——“自分とは何か”という問いをつきつめざるをえない状況に身をおくことになり、そうした危機的状況の中で、個々人は各々の自己原型についての感覚や意識を手がかりにして意識的な形で本人らしさを模索する時期を迎えることになる。そこで繰り広げられることは、その本人の核心をなしていると思われる自己を探りあてるためのさまざまな試みと見なすことができるから、それをここでは‘核心的自己主題化局面’⁵⁾と呼ぶことにする。

(4) 自己把握の2様式——自己の感覚的把握と自己の意識的把握、この2つのやり方で、ぼくたちは自己をそれとして日常的に把握していると見なすことができる。この自己把握の様式をここでは自己[○]感覚と自己[○]意識と呼ぶことにする。自己感覚とは、身体感覚を通しての自己把握のことであり、自己意識とは、対象としての自己に気づくという形での自己把握のことである。

(5) 自己のありよう(=自己存在)への着目——経験的に見た場合、自己のありようにはさまざまな安定度があると言することができる。R.D. Laingはこの点を鋭く「存在論的安定性」と「存在論的不安定性」という形で定式化しているが (Laing[1961 :pp. 39 - 61 = 1971 :pp. 47 - 79]), ここでは、この Laing の定式化をふまえて、存在論的安定性が優位する状態(これはまた、ある個体が E.H. Erikson 氏の言う「基本的信頼」(Erikson[1950 :pp. 247 - 251])を獲得しえている状態と見なせよう)から存在論的不安定性が優位する状態にいたるまで、多様な自己のありようが見られるという経験的事実に注目することにする。こうした自己のありようを‘自己[○]存在’と呼ぶことにすると、自己存在の感覚と意識とがとりわけ重要な意味をおびてくるのは、即自的な形で生み出されてくる本人らしさの原型が与えられてくる自己原型生成局面である。

(6) 3種の自己過程——先に自己生成プロセスの2局面のところで

自己生成のプロセスやそこでの自己把握の様式に関連したものとしては、自己原型・核心的自己、自己感覚と自己意識、自己存在がある。自己の過程的性格に注目したものとしては自己過程が、また自己のコンテクストづけという観点に関連したものとしては、自己解釈、自己定義、自己認識をあげることができる。さらに、本人の眼に映っている本人の姿をめぐる諸問題を主題化する上では、自己イメージ・自己像とその結晶化とあいまい化が、また自己のもつ関係的側面を照らし出す上では、関係的对象と自己環境が重要な意味をおびてくる。

(3) 自己生成プロセスの2局面——ここでは自己生成のプロセスを自己原型生成局面と核心的自己主題化局面の2つにわけて把握することにした。

自己原型生成局面^{○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○}というのは、自他融合状態から、ある個体の、いわば“本人らしさ”の原型が生み出されてくる局面のことである。ぼくは一方で、個体に関わりをもつさまざまな対象——これを以下、‘関係的对象 (relational object)’ と呼ぼう——との相互作用の中で、自己にまつわる感覚や意識というものが生成されてくるものである、という立場に立つ。しかし他方では、遺伝的諸特質によって規定されてくる諸傾向も含めて、後にいわば本人らしさとして発現してくることになるものの萌芽は、個体誕生の時点においてさえ、すでに存在していると考え。ここで自己原型というのは、そうした萌芽的なものを素材にしながら関係的对象との相互作用の過程で即自的な形で生み出されてくる本人らしさのひな型＝原型のことである。自己生成のプロセスは、まずは、こうした自己原型が生み出されてくる過程を第一局面として持っているということだ。

そして次にくるのが核心的自己主題化局面^{○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○}である。自己原型生成局面を経ることを通して、ぼくたちは、事実上、自己生成の問題に直面しているわけだが、しかし、文化的、社会的、経済的もしくは個人的事情に由来する“一本立ち”の圧力の下に——したがって典型的には (E. H.

ろで、物事を勝手に納得したり強い思い込みをしたり、といった形で、この能力を発揮しているという経験的事実を肝に銘じておきたいと思うからである。

最後に、想起能力とは、ある過去の時点で出くわしたり体験したことを後になってそれをそれとして具体的な形で思い起こすことができる能力のことである。この能力をもっているからこそ、ぼくたちは、“確かにそういうことがあった”と自信を持って再確認できるのである。そもそも自己の同一性や連続性といったことを議論しうる前提には、ぼくたちが、通常、この能力をそなえているという事実がある。自己論との関連におけるこの事実の決定的重要性については、例えば、いわゆる“ボケ”現象に見られるように、想起能力そのものに狂いが生じてきた場合にそのことがその人間の自己のありようにどのようなにはねかえってくるかという点に思いをめぐらしてみれば、明らかなはずである（「記憶こそがわれわれの人生をつくりあげているものだということに気づくには、ほんのちょっとでいいから記憶を失いかけてみればよい。記憶のない人生などというものは、まったく人生ではないのだから。……われわれの記憶こそは、われわれの人格の統一を保っている当のものなのであり、われわれの理性、感情、それどころか行為でさえあるのだ。記憶がなければ、われわれは無に等しい。……」というルイス・ブニュエルの言葉⁴⁾はこの点を見事についている）。ぼくたちは否応なく年をとっていく存在であるわけだが、この年をとっていくという事態の中には、想起能力の喪失という一種の“時限爆弾”が埋め込まれていると言っている。そうした不気味な“爆弾”を抱え込んでいる人間存在のありようを視野に入れるなら、“自己”という事象は相当危うい基盤の上に成り立っているということができるかもしれない。

(2) 自己論展開のためのいくつかの用語の設定——ここでは、
(3) 以下の要点の説明に先立って、ぼくのイメージする自己論の展開にとって戦略的な位置を占めるいくつかの用語を提示しておきたい。自

Polkinghorne 氏の議論を参考にしながら³⁾ この能力を次のような形で大きく 4 つのグループに分けて位置づけておくことにしたい。

(a) 知覚主体の側の識別能力との関連では、(イ)〈X と同じものとしての A〉という関連づけ (同一性の発見・確認)、(ロ)〈X と類似したものとしての A〉という関連づけ (類似性の発見・確認)。

(b) 論理的・因果的連関という関連では、(ハ)〈X と論理的に結びつくものとしての A〉という関連づけ (論理的結びつきの発見・確認)、(ニ)〈X の原因 [もしくは] 結果としての A〉という関連づけ (因果的結びつきの発見・確認)。

(c) より大きな (もしくはより小さな) 何かとの関連では、(ホ)〈X の一例としての A〉という関連づけ (例示の発見・確認)、(ホ)'〈X の総体としての A〉という関連づけ (総体の発見・確認)、(ヘ)〈X の一部としての A〉という関連づけ (部分の発見・確認)、(ヘ)'〈X の全体としての A〉という関連づけ (全体の発見・確認)。

(d) 知覚対象の水準を越える何かとの関連では、(ト)〈X の代理としての A〉という関連づけ (代理関係の発見・確認)。

次はコンテクストづけの能力である。ぼくたちは、ある未知の事象に出くわすとこれを (場合によってはかなり強引な形で) 自分なりに意味的なまとまりをもったものに変換してしまうという強い傾向をもっている (ぼくはこの点を、〈コンテクストの設定に成功すれば、そこに意味が生み出されてくる〉という言い方で表現することにしている)。しかも、このコンテクストづけは基本的に恣意性にかかっているという注目すべき特徴をもっているのだ。ここでコンテクストづけの能力というのは、この、未知の事象から意味的なまとまりをつくりだしてしまう能力のことである。この能力は、先の関連づけの能力のいくつかのものをその都度特殊な形で活用しているものと見なすことができるかもしれないが、ここでわざわざ特別にこの能力をクローズアップしてくるのは、後に言及することになる '自己解釈' の場合も含めて、ぼくたちはいたるところ

きないけれども、しかし、思考実験的にそのインパクトを与える側が存在した場合と存在しなかった場合とを比較すれば、インパクトを与える側が存在したことによって、インパクトを与えられた側に、あいまいで微妙ながら、なんらかの変化もしくは持続のありようが生みだされたのではないかと想定できそうな場合、これを‘潜在的インパクト’と呼ぶことにしたい。すぐ次の「4.1.2. 〈インパクトを与える可能性のあるもの〉について」のところでも見るように、ある個人の自己もしくは自己形成へのインパクトを考える際にクローズアップしやすいのは、言うまでもなく、顕在的インパクトである。他方、ある個人の自己形成を考えていく際のいわば裾野を形づくっているといっている潜在的インパクトの方は、顕在的インパクトとともに、自己環境論のところで触れていくことにしたい。

今度は〈自己もしくは自己形成へのインパクト〉という場合の自己ならびに自己形成の意味について、である。さまざまな論者の議論をふまえた上で自己論をより本格的な形で議論するとなると、これはこれで大仕事になるので、それは別の機会に譲ることにして、ここでは、現時点におけるぼくなりの自己論の骨格を暫定的な形で提示しておくことにする。ぼくの自己論の要点は、箇条書き的に以下の12点にまとめあげることができる。

(1) 自己論展開の前提としての関連づけの能力・コンテクストづけの能力・想起能力の存在——ぼくは、これら3つの能力が、通常、人間にそなわっていることを確認しておくことが、自己論を展開していく際の前提としては大切だと考えている。

まず、関連づけの能力とは、ある対象(A)を知覚している時——そして、ぼくたちはこの知覚ということをはほとんど常にやっているわけだが——、その知覚対象を何らかの関連で、別のものもしくは別のこと(X)と結びつけていく能力のことである。ここでは、D.E.

を及ぼす場合があるということである²⁾。要するに、分析者として対象者本人にとってのインパクトの評価をどう判断するかという問題は、実際のデータを前にしてこれに向き合う段になると、意外に微妙でむずかしい問題を抱え込んでいるということである。

次に（b）について。インパクトを与える事象が本人以外に由来する場合というのは、——例えば、両親のしつけ方は陰に陽に子供たちの人間形成に影響を及ぼすものだ、とか、文化はパーソナリティー形成に影響力を持っている、といった具合に——通常用いられる用法だから、何ら説明の必要はないだろう。しかし、インパクトもしくは影響という言葉で、影響を与える事象が本人自身に由来する場合をも含める、というやり方については、異議をさしはさむ人が出てくるかもしれない（「本人ガ本人ニ影響ヲ与エルンダッテ??」）。しかし、T1時点もしくは時期の本人のありよう（物の考え方、価値観、活動への取り組み方など）がT2時点もしくは時期の本人のありようを生みだす要因となりうるということは、大いにありうるということ、しかも物心がついて以降の人間（すぐ後に提示する自己論の用語を用いるなら、自己原型生成後の局面における人間、ということになる。『中学生』の中野さんは明らかにこの部類に属する）を分析の対象にする場合には、その人間は基本的に活動主体としての自己とともに‘内的対話’の相手としての自己を持ちうる（つまり、最低限、本人の意識が二重化しうる）ということを経験し、考慮に入れるなら、インパクトを与える事象が本人自身からやってくる場合は十分想定しうるし、無視しえない重要性を持っている。

最後に（c）について。AがBにインパクトを与えるというのは、AがBの変化もしくは持続のありようを‘規定する’ことだとしたが、そこで‘規定’された変化もしくは持続のありようがどういったものであるかを、はっきりと特定化できる——言いかえると、データのうちに直接的に見いだすことができる——場合、これを‘顕在的インパクト’、これに対して、そうしたありようをはっきりと特定化することまではで

ている場合のことを指す。

このように分析的に3つの場合を区別する限りでは、一見したところ何の困難もないように思われるかもしれない。しかし、実際のデータに即して、本人の自己形成という観点との関連で本人にとってのインパクトの内容の評価を行なおうとする場合には、様相はかなり変わってこざるをえない。それは、恐らく次のような点を視野の内に組み込んでこななければならないからである。一つは、評価主体の複数性である。つまり、このインパクトの評価を下す主体としては、本人自身、本人の考え方や感じ方に影響力をもった周囲の人々、分析者等を想定しうること、しかも、評価主体間に——あるいは評価主体内に分裂が見られる場合には、評価主体内においてさえ——判断の違いやズレ、矛盾等が生じうる可能性があるということである。なぜ評価主体の複数性に注意を払う必要があるのか。それは、インパクトの内容の評価について評価主体間もしくは評価主体内に判断の違いが見られる場合には、分析者としては、ある個人の自己形成という観点との関連でどの評価をいかなる理由で優先すべきなのか、という問題が否応なく生み出されてくることになるからであり、この問題はまた、ある個人の自己形成プロセスについての全体像を（分析者が）描き出す際における個別のエピソードのインパクトの評価の位置価値もしくはウエイトづけという問題とも接続してくるからである。二つ目は、時の経過が関連してくることが多いが、インパクトの評価を下す主体の側の事情（認識枠組み、価値観、人生観等）の変化や、どういう問題との関連でそのインパクトの意味を考えるかによって、評価についての判断自体に大きな変化が生みだされてくる可能性があるということである。三つ目は、先にインパクトの作用の仕方の間接性と呼んだことと関連している。つまり、インパクトを与える事象の性質だけでなく、そうした事象の影響を受ける主体の側の受けとめ方次第では、周囲から見る限り本人にとって明らかにマイナス（プラス）のはずと判断できる事象でさえ実際にはプラス（マイナス）の作用

握することの重要性を指摘しておきたい。先に「あるものはたらきがほかのものにおよんで」という表現を引用したが、この表現自体には、AがBに対して一方的にインパクトを与える、といった印象を与えがちなどころがある。しかし、すぐ次の項で検討する〈インパクトを与える可能性のあるもの〉の諸事例からも明らかなように、そうした印象とは違って、実際に具体的なデータに即してAのBに対するインパクトのありようを確定してこようとすると、どうしても、インパクトを与えられるBの内部において、AとBとの間に——より正確には、Aに由来する何かとBの側の何かとの間に——さまざまな形での相互作用過程が進行しているという視点に留意せざるをえなくなる。あるいは、Aに由来する何かに対するBの側のある特有な反応群を確定してくるということが必要になってくる、と言ってもいい。そうした意味で、〈インパクト〉現象に着目するというのは、Aとの関連によって直接・間接にBの内部に生み出されてくるさまざまな波紋にまなざしを向けることだと言うことができるかもしれない。

第五は、インパクトの種類の振り分けである。これについてはいくつも考えることができるだろうが、ここでは、自己もしくは自己形成へのインパクトという点から見た重要性をにらみながら、次の三つを区別しておきたい。

- (a) プラスのインパクトとマイナスのインパクトとアンビヴァレントなインパクト
- (b) 本人以外に由来するインパクトと本人に由来するインパクト
- (c) 顕在的インパクトと潜在的インパクト

まず(a)は、インパクトを受ける本人にとって問題のインパクトがプラスと評価しうる内容を持っているか、マイナスと言わざるをえない内容を持っているかの違いに着目したものである。説明するまでもないと思うが、ここでアンビヴァレントなインパクトというのは、問題のインパクトが本人にとってプラスの意味とマイナスの意味とを同時に持つ

T 1 より後の時点もしくは時期（これをT 2 とする）におけるBとの間に識別可能な違いが見られることである。他方、T 1 からT 2 にかけてBにそうした違いが見られない時、これをBの持続と言う。

第三は、AがBの変化もしくは持続のありようを‘規定する’[○]というこの意味である。これは、Bの変化もしくは持続のありようがなんらかの形でAの作用圏に入るか、Aの作用を受けることを指している。BがAの作用圏に入るのはAの規定力が強い場合であって、この時、Bの状態もしくは過程のありようはAとの関連によって直接・間接に大きく枠づけられてくることになる。他方、BがAの作用を受けるのは、Aの規定力が弱い場合であって、この時、Bの状態もしくは過程のありようはAとの直接的・間接的関係を持ってくることになる。

第四は、AがBの変化もしくは持続のありようを‘規定する’[○]という場合、そこで言う規定としてはどういったものを想定できるか、という点である。規定の仕方[○]もしくは規定様式[○]としてはどんなものがあるか、と言ってもいい。ここでは、変化が問題になっている場合と持続が問題になっている場合とを区別して次のような想定をしておきたい。まず、Bの変化が問題の場合には、Aが（a）原因、（b）きっかけ、（c）準拠点（プラス・モデル、マイナス・モデル、比較対象、支持基盤など）もしくは（d）〈鏡〉、のいずれかになってBの状態もしくは過程に作用する、と定式化できるように思う。これに対して、Bの持続が問題の場合には、Aが（a）’原因、もしくは（c）’準拠点（プラス・モデル、マイナス・モデル、比較対象、支持基盤など）、のいずれかになってBの状態もしくは過程に作用するように思われる¹⁾。AとBとが因果関係で直接的に結びついている（a）もしくは（a）’の場合を別にして、（b）、（c）、（c）’、（d）の場合は、AとBとの関係は、すべて間接性を特徴としている。

ここで、第三と第四での議論を踏まえつつ、Bの内部において進行する相互作用過程（interactional process）として〈インパクト〉現象を把

の意から) 関係を及ぼすこと。また、その及ぼされた関係。さしひびき。」(新村[1969:p. 227]) とか「あるもののほたらきがほかのものにおよんで、なんらかの変化をひきおこすこと」(林他[1984:p. 90]) が与えられている。後者の定義では、とりわけ変化という点が注目されており、これはこれで、ぼくたちが影響という場合に意味していることの重要な一面を言い当てているように思う。しかし、ある個人の自己もしくは自己形成に何がどのように効いているのかを探るという観点からすれば、そうした面とともに、「あるもののほたらきがほかのものにおよん」だ結果、(そういうことがなかったなら生じていたかもしれない) 変化を生じさせないという形で影響が出てくる場合があるという点も無視できない。そこでここでは、そうした事情を考慮に入れて、Aという事象(人・もの・こと)が、Bという事象(人・もの・こと)の状態もしくは過程の変化もしくは持続のありようを‘規定する’時、AはBに対してインパクトを与える、と呼ぶことにする。

ここで注意したいのは以下の諸点である。第一は、インパクトを与える側としてAという事象を、インパクトを与えられる側としてBという事象の[○]状態もしくは[○]過程をおいていることの理由について。これは、ここで見ようとしているのが、自己もしくは自己形成へのインパクトだ、という点に関連している。つまり、ある個人に生起したり、ある個人をとりまくさまざまな事象が、ある特定時点もしくは時期における、その個人の自己の状態もしくは、ある時期、その個人において進行しつつある自己過程に影響を及ぼすことがあるという事態に注目しているということである。

第二は、Bの[○]変化もしくは[○]持続ということの意味についてである。ここでBの変化というのは、Bを特徴づけている諸特性を選び出してくることができる[○]と仮定した上での話だが、これらの諸特性によって規定される、T1というある特定の時点(状態が問題になっている場合)もしくは時期(状態もしくは過程が問題になっている場合)におけるBと、

を、可能な限り特定化してこよう、ということである。

これを以下では次の順序で行なうことにしたい。まず 4.1.1. では、〈自己もしくは自己形成へのインパクト〉という視角を構成しているインパクトという用語と自己という用語の各々に即して、さまざまな観点からそれらの意味内容を明らかにすることを通じて、〈自己もしくは自己形成へのインパクト〉という視角がもっている豊かな展開可能性を描き出す。次いで 4.1.2. では〈インパクトを与える可能性のあるもの〉という用語に注目することによって、この視角からデータを読み解き絞り込んでいく際の橋頭堡を築くという作業を行ないたい。さらに、4.1.3. では、何人かの論者たちによる、〈自己環境の構成要素〉という視角に類似した議論を紹介・検討する形で、自己論の一環として存在する自己環境についてのイメージをより具体的なものにすることを試みる。そして 4.2. では、「2. 見出し分析」や「3. テクストのタイプの分析」での議論や成果を含めて、4.1. までの道具立てをフル動員して『中学生』のデータの読解・絞り込みを行なった結果を提示することによって、「『中学生』執筆当時の中野さんの社会的自己形成の過程を浮き彫りにする」（水野 [1992 a:p. 84]）という「1. はじめに」で提起しておいた課題に対するぼくさんの解答を試みることにしよう。

4.1. 自己もしくは自己形成へのインパクトと自己環境の構成要素

4.1.1. 〈自己もしくは自己形成へのインパクト〉の意味

まず、〈自己もしくは自己形成へのインパクト〉という表現の仕方に注意していただきたいと思う。「インパクト」という用語を別の言葉でおきかえるとすれば、「影響」という言葉をあてることができるだろう。影響の定義として手元の辞書には、「（影の形に従い、響きの音に応ずる

『中学生のみた昭和十年代』と 個人生活史研究

— 三段階の分析の試み — (下) — 1

水 野 節 夫

1. はじめに
2. 見出し分析 (以上第 38 巻第 3・4 号)
3. テクストのタイプの分析 (第 39 巻第 2・3 号と第 4 号)
4. インパクト分析
 - 4.1. 自己もしくは自己形成へのインパクトと自己環境の構成要素
 - 4.1.1. 〈自己もしくは自己形成へのインパクト〉の意味
 - 4.1.2. 〈インパクトを与える可能性のあるもの (impact potential)〉について
 - 4.1.3. 自己環境の構成要素 (以上本号)
 - 4.2. 中野さんの社会的自己形成へのインパクトの検討
 - 4.3. 小括
5. 終わりに

4. インパクト分析

ここでの課題は、『中学生』を素材にして『中学生』執筆当時の中野さんの社会的自己形成ということを考えてみた場合、一体、どういった事象（これには、人物、精神活動、認識、〈体験〉、エピソード等が含まれる）がどういう具合に効いているのか、という問いに対する解答を試みることである。このセクションのタイトルであるインパクト分析にひきつけて言えば、中野さんの社会的自己形成ということに対して、何らかの形でインパクトを与えていたと思われる人・もの・ことの析出を試みるとともに、それらがどのような形でインパクトを与えていたのか